

平成18年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名トラフグ

学名 *Takifugu rubripes*

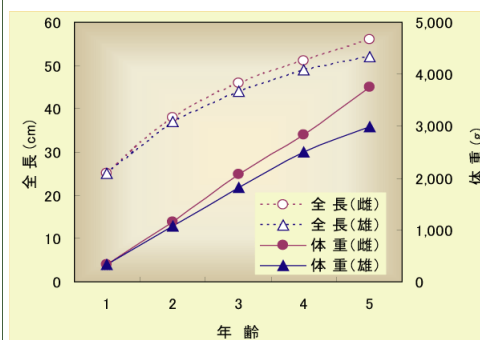
系群名 日本海・東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳以上
成熟開始年齢: 雄2歳、雌3歳
産卵期・産卵場: 春季(3～6月)、若狭湾、関門海峡周辺、備讃瀬戸、布刈瀬戸、福岡湾湾口、有明海、長島海峡
索餌期・索餌場: 周年、日本海西部、東シナ海、黄海
食性: 仔魚後期までは動物プランクトン、稚魚は底生性の小型甲殻類、未成魚以降はエビ・カニ、魚類等
捕食者: 不明

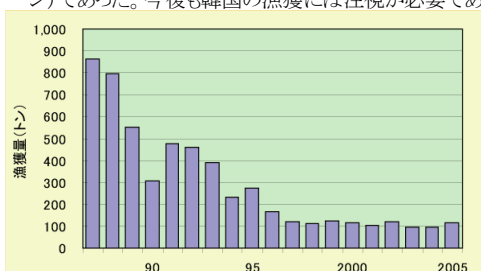


漁業の特徴

主にふぐはえ縄で漁獲されるが、沿岸域では産卵親魚や若齢魚が定置網、底びき網、釣り及び刺網等様々な漁法で漁獲される。ふぐはえ縄漁場は黄海、東シナ海及び五島灘から山陰に至る日本海であるが、1988年以降は漁獲の減少などから黄海へ出漁するふぐはえ縄船は減少し、近年では我が国200海里内が主漁場となっている。済州島周辺では、韓国延縄船による操業も行われているが、詳細については明らかでない。

漁獲の動向

日本各地で水揚げされたトラフグが集積される下関唐戸魚市場(株)で外海産として扱われるトラフグの取扱量をトラフグ日本海・東シナ海系群の漁獲量とした。この漁獲量は盛時には1,000トン近くあったが、1989年以降減少を続け、1998～2000年は100トン程度、2004年は過去最低の73トン、2005年は78トンとなった。日本の200海里内での韓国漁船によるフグ類の漁獲は2001年には236トン記録したが、2004年以降激減し、2005年は12.3トン(トラフグ0.3トン)であった。今後も韓国の漁獲には注視が必要である。

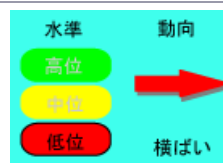


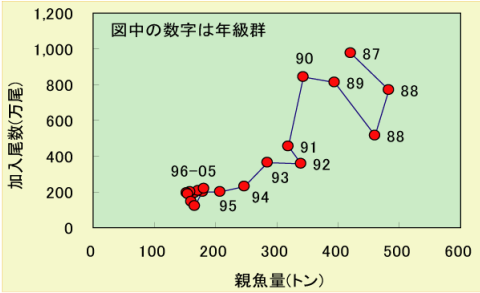
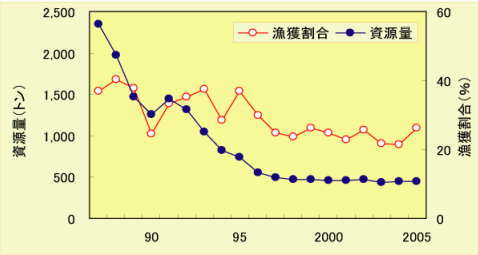
資源評価法

トラフグの脊椎骨に形成される年輪に基づいて全長一年齢一入り数(銘柄)換算表を作成した。この換算表を用いて、下関唐戸魚市場(株)及び福岡魚市場(株)のトラフグの年齢別取扱量を算出し、1987～2005年の本系群の年齢別漁獲尾数を推定した。誕生月を5月とし、5月～翌年4月を年級群解析の単位とした。過去の研究事例を踏まえて自然死亡係数を0.36とし、コホート解析を実施した。

資源状態

コホート計算の結果、トラフグ日本海・東シナ海系群の資源量は1991年以降減少に転じ、1990年代後半には極めて低水準となり、近年まで同水準のまま推移している。同様に1996年以降は親魚量が少なく加入水準が低い状態が続いている。2004年と2005年は近年に比べ3歳以上の漁獲量が増加しているが、2005年の加入水準が低く見積もられることから、2006年も引き続き資源水準は低位に推移するものと考えられる。



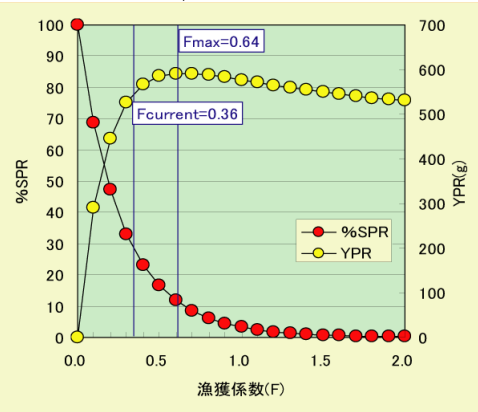


管理方策

1980年代以降の本資源の漁獲量の低下は、過剰な漁獲圧により引き起こされたと考えられる。1990年代後半以降漁獲努力量はやや減少している。しかし、環境の影響等による加入量の大きな好転などがなければ、現状の漁獲圧のままでは本資源は現状維持もしくは漸減するものと考えられる。よって漁獲圧を下げることで資源の回復を目指すことが妥当であると判断する。

	2007年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	72トン	0.7Fcurrent	0.25	18%
ABCTarget	59トン	0.8・0.7Fcurrent	0.20	15%

- 漁獲割合＝ABC/資源量
- F値は各年齢の単純平均
- Fcurrentは2005年のF



資源評価のまとめ

- 近年の資源量は極めて低い水準にあると考えられる
- 本資源の漁獲量が低下した要因は、過剰な漁獲圧によるものと推定される
- 2005年の加入水準は高くない可能性がある

管理方策のまとめ

- 現状の漁獲圧を削減することにより資源量の回復を図る
- 生態的な関係が深い瀬戸内海系群を含めた西日本全域における管理が必要である

資源評価は毎年更新されます。